

日本近世在来捕鯨業の研究：組織・経営・資源動員の比較史

古賀, 康士

<https://hdl.handle.net/2324/2348717>

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（文学）, 論文博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名	古賀 康士			
論 文 名	日本近世在来捕鯨業の研究 ―組織・経営・資源動員の比較史―			
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	岩崎 義則
	副 査	九州大学	教授	佐伯 弘次
	副 査	九州大学	講師	国分 航士
	副 査	九州大学	教授	遠城 明雄

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、17世紀から19世紀にかけて壱岐・対馬・五島列島から北部九州沿岸における基幹産業として発達した西海捕鯨業を主な分析対象として、日本近世の在来捕鯨業における組織・経営・資源動員のあり方を比較史的に解明することを目的とする。本文は、前編・後編の2部構成をとり、本論8章と1つの補論、これに序章・終章から成る。

前編は西海捕鯨業を中心とした分析である。序章では、日本在来捕鯨業の研究史を5つの段階に整理し、それぞれの研究史的な意義づけが述べられるとともに、先行研究が抱える枠組みの限界が示された。第1章では、日本近世の在来捕鯨業の基本的な特徴を整理するため、人類史における「捕鯨」の意義付けと、16世紀後半以降、日本列島各地で捕鯨が「産業化」し、在来捕鯨業として成立する過程が解き明かされる。第2章では、西海捕鯨業の鯨組に広く見られた「小納屋」と呼ばれる独立経営の組織体を分析する。ここでは、西海捕鯨業の産業的な構造を解明するため、地域と金融という視座から小納屋の史的意義が解明された。こうした小納屋の経営分析の一環として、近世中期以降、主要な商品となった鯨肉の流通機構が、第3章において明らかとなる。こうした鯨肉流通については、従来、鯨油を主力商品とした鯨組本体の経営分析に焦点があったため、小納屋を核に形成された地域的な生産・流通機構の構造は不分明であった。第4章では、近世後期以降、西海捕鯨業の鯨組の一類型である「中小鯨組」をとりあげ、その経営的な特質や地域社会・経済との関わりが明らかにされた。特に、羽指や加子といった労働者たちの実態解明により、鯨組の経営分析に特化していた研究史的な制約も解消されている。第5章では、壱岐勝本浦の土肥組を対象として、「巨大鯨組」の経営が論じられた。そこでは、人的・物的資源の動員に多様性がみられたこと、さらに、地域において鯨組が果たした機能が解明された。前編の補論において、鯨組の記録管理のあり方が明らかとなった。後編では、前編での分析を基礎に、近世日本の主要な捕鯨地域を比較史的に検討する。第6章では、長州捕鯨業について検討を行い、西海捕鯨業にはみられない特徴とその歴史的意味を析出した。第7章では、土佐捕鯨業の労働組織を中心に分析がなされ、定説が抱える問題点が検討された。第8章では、再び西海捕鯨業へと視点を戻し、捕鯨場の漁場秩序の構造が解明された。終章では、日本近世の在来捕鯨業の特質を比較史的な観点からとりまとめた。

以上、本論文は日本近世における在来捕鯨業、とりわけ、西海捕鯨業の分析とその比較史的な研究において、新境地を開拓した優れた研究成果であり、今後、当該分野の研究の進展に大きく貢献することは疑いない。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）を授与されるのに、十分な能力を有することを認めるものである。